

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ



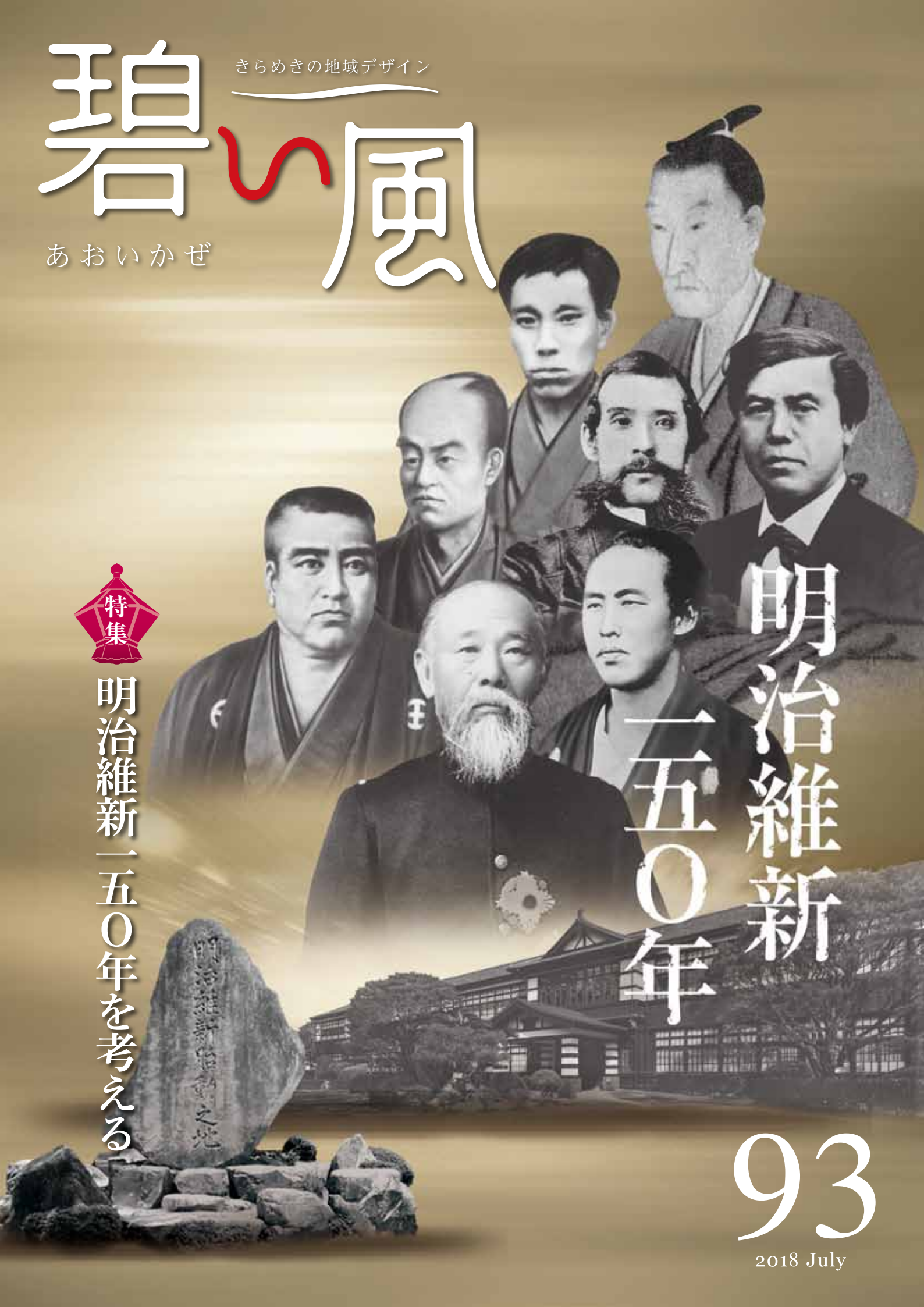
特集

明治維新一五〇年を考える

明治維新
一五〇年

93

2018 July





明治維新一五〇年を考える

視点 明治維新一五〇年で想うこと 大阪大学名誉教授 猪木武徳

6 幕長戦争の光と影 広島大学名誉教授 三宅紹宣

10 備後地方で繊維産業がなぜ発展したのか 国士舘大学教授 阿部武司

12 明治教育の継承と変革 岡山大学大学院准教授 梶井一暁

14 「地域に生きる企業家群像」 日本植生株式会社 代表取締役社長 柴田明典（岡山県津山市）

18 「キラリ、輝く元気企業」 66 高品質の電動バイクを生産し、アジアで販売数を増やす株式会社ツバメ・イータム（山口県岩国市）

20 「夢紡人／ゆめつむぎびと」 89 資格を持ちながら休職中の潜在看護師らと共に利用者目線で介護や育児を支援する神戸貴子さん（鳥取県米子市）

23 「この名酒にこの一品」 16 雁木ノ式 純米吟醸 無濾過生原酒 おぼろ豆腐（山口県岩国市）

24 「近現代芸術再発見」 9 奥田元宋（広島県生まれ）「1912〜2003」

26 「古典に学ぶ」 4 韓非子とその思想 津山工業高等専門学校教授 杉山明

28 「山をあるく」 4 船通山（鳥取県・島根県）

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

碧い風

あおいかぜ

93

2018 July

contents



明治維新一五〇年を考える

視点

明治維新一五〇年で想うこと

大阪大学名誉教授 猪木武徳

時を区切って振り返るという智恵

明治新政府が「王政復古」を各国公使に通告、外国との和親を国内に布告して一五〇年というエポックを記念して、行政やメディアはさまざまな記念事業を計画しているようだ。こうした動きに対して、「明治一五〇年」という区切りによいような意味があるのか、「明治一〇〇年」のような盛り上がりはないなど、冷めた反応を示す向きもある。だが筆者は日本の現状を思うと、一五〇年という時点で明治維新以降の近代日本を振り返ることは特に大事だと考える。

物事を時間で区切り、年を数え、時代を区分することは、人間にとって極めて重要な意味を持つ。例えば、正月

という新しい年の「区切り」を考えてみよう。「一年の計は元旦にあり」と言い、「旧年を振り返り新しい年に思いをはせる」という正月は妙な習慣だと考える人もいる。しかし人間が時の中に反復と変化を読み取り、暦を作り、さまざまな「区切り」を設けて生活に規律と秩序を生み出そうとしたことには深い智恵があるのだ。

われわれは自分は合理的だと思いつているが、実はそれほど論理的ではなく、首尾一貫性を持った存在ではない。昨日の自分と今日の自分では、考えが変わっていることもある。経験から確実に学んで賢明になり、時とともに進歩を重ねているわけでもない。だからこそ、時に「区切り」を設けて見失った記憶を呼び起こして己を振り返り、姿勢を正すことが必要だと思



維新の三傑と呼ばれる木戸孝允(長州)、西郷隆盛(薩摩)、大久保利通(薩摩)。司馬遼太郎は『翔ぶが如く』で西郷と大久保の友情そして対立を軸に、幕末維新期を描いた。写真提供：国立国会図書館デジタルコレクション

だかつて一度もなかった」という逆説的な言葉を残している。彼は次のように言う。「歴史上未来にたいしてほんとうに何かを為した人物は、みな過去に目を向けていた。(中略)ミケランジェロやシエークスピアの独創は、昔の壺や写本を掘り起こすことにはじまった。(中略)中世はローマ帝国の記憶があったから復活した。宗教改革は聖書と聖書時代をふりかえった」そして「不思議にも人間は、実りを得るためには常に墓のなかに木を植えなければならぬ。死者のあいだにしか生は見いだせない。人間とは奇態な怪物である。足は前に踏みだしながらアタマは後ろをむいている」のだと。

一〇〇年であれ一五〇年であれ、われわれ現代に生きる者が過去を振り返ることは実に大切なことであり、振り返ることなしに前だけを見つめることは浮薄な空論を生み出しかねない。

文学と旅から学ぶ

明治維新前後の日本の社会と政治の動きについて、筆者は学生時代、司馬遼太郎の傑作小説群『竜馬がゆく』『花神』『世に棲む日日』『翔ぶが如く』などから得たイメージに魅せられてきた。そこで語られているのは、薩摩と長州、そして土佐の志士たちの激しい動きで

●表紙写真：(上から)吉田松陰、高杉晋作、木戸孝允、大久保利通、大村益次郎、西郷隆盛、坂本龍馬、伊藤博文、萩・明倫学舎、明治維新胎動之地記念碑 表紙写真提供：国立国会図書館デジタルコレクション、萩市、一般社団法人山口県観光連盟

●目次写真提供：一般社団法人山口県観光連盟、山口県立山口博物館、林田 悟、株式会社ツバメ・イータム、N.K.Cナースング コア コーポレーション合同会社、竹重 満憲

●デザイン：有限会社シフト

*本誌は再生紙を使用しています。

あり、坂本龍馬や高杉晋作、あるいは西郷隆盛などの西南雄藩の下級武士や勝海舟などの幕臣出身の英雄的な人物が活躍する、文字通り「巻を描く能わざる」ストーリーであった。虚実ないまぜではあっても、それは学校で学んだ日本史よりはるかにダイナミックで魅力的な歴史物語であり、人間を学ぶ絶好の機会でもあった。人名と年代、内実のよく分からない史学の専門用語でいっぱい教科書を、試験のために暗記させられた日本史の授業から解放された喜びがあった。

その後、筆者は吉村昭と山田風太郎の大ファンになり、今も歴史小説の魅力から抜け出せずにいる。吉村の事実を綿密に調べ上げた作品の与える感動、風太郎の明治もの大胆な仮説の痛快さからは多くを教えられた。最近も、史料を駆使した歴史文学の一つである島崎藤村『夜明け前』を再読して一文を草したが、文学者の描く歴史の面白さを再認識する機会となった。

専門の歴史家の著作だけでは満足感が得られない理由の一つは、時代ごと分野ごとに研究の専門化が著しく進み、通史の一部となり得るような全体的な視野に立つ作品がすぐには思い浮かばないためだ。明治維新というテーマ一つをとっても、広い視点から、そ

「気概」の源となった時代背景

藤村の『夜明け前』を読むと、西南雄藩の経済状況と維新の改革運動、そしてその思想的背景の間には重なり合うところが大きいと感じる。

国力を診断する場合、最も基本となる指標は人口とその増減であるから、江戸後期の日本社会の状況を知るためには、人口動態に注目する必要がある。江戸期前半の一七二〇年ごろまでの日本の人口の増加率は高かった。しかしそれ以後、幕末維新期までの約百三十年間は、総人口がほぼ三千万人前後のまま推移する「人口停滞社会」であった。

総人口はほぼ一定であったが、人口の増減には大きな地域差が存在した。京・大坂・江戸では文化が爛熟しており人口の自然増加力が減耗したことは推測がつく。実際、これら三都は「独身者の増加、晩婚化、出生児の減少」という現代とそっくりな現象を来している。総じて、近畿・関東・東北の三地方は大きな人口減少を示しているのだ。凶作・天災・飢饉に見舞われた東北をはじめ、目立った人口減少を見た藩は東日本に多かった。逆に、山陰・山陽・四国・九州では人口増加が著しかった。特に薩摩、周防、土佐など、維

の前後の流れを重視しつつ論じるような書物はあまりない。同業者を意識し、同業者の間での「内輪の話」に終始していないだろうか。歴史であるから「事実」を問題にすべきことは言うまでもないが、史料がない問題についての言及には史家は概して禁欲的だ。多く読んでいるわけではないが、想像や推理の「技」でハッとさせられることが少なくなった。

近年痛感するのは歴史を学ぶ上での旅の効用だ。筆者は七年ほど前から、近代日本の工業化の重要な担い手となった産業の一つ、鉱工業の跡地を若い研究者たちと踏査する旅を続けている。日本の北から南まで、四十カ所近くの金、銀、銅、鉄、石炭、マンガ、硫黄などの鉱山や鉱業所、そして近隣の史跡や温泉地を訪れる。往時の繁栄を偲ぶような場所への旅を重ねるうちに、まだまだわれわれに知られていない「明治維新」があるのだということを実感するようになった。

歴史家の描く明治維新も一つのストーリーである。だとすれば、活字情報だけではなく、その場所に赴いてその空気を吸い、周りの風景に接すれば、予期せぬ事実に出合えるのではないか。中国地域も何度か訪れた。著名な島根の石見銀山や広島・島根のた

新期に多くの志士を輩出した西南雄藩は大きな人口増加を記録している。

その因果関係を確定することは難しいが、東日本に比べて経済的に豊かであった西日本のいくつかの藩が、教育や軍事技術の導入に熱心であったのは経済的な余裕があったからではないか。農業人口が全人口の九割近くを占めていた近世社会では、マルサスの論を待つまでもなく、人口と経済力(すなわち食糧)の関係はかなり直接的であったはずだ。

興味深いのは、藤村の『夜明け前』で江戸後期に人口増加を経験した地方では、平田派の国学が武士階級にもかなり浸透していた点が指摘されていることだ。平田の門人は医者、庄屋、本陣、問屋か、さもなくば農民町人の上層部などの社会層であって、士分は少ないといわれる。それでもいくつかの藩の武士の中に門人がいたという。天保時代の平田篤胤門下の古い門人帳を引き合いに出して、「篤胤直門は五百四十九人ぐらいで、その中で七十三人が士分のものである。藩ぐらゐから、そういう人達を出しているよ。最も多い藩が十四人、最も少ない藩が一人という風にね。鹿児島、津和野、高知、名古屋……」という記述があるのだ。

ら鉄などはもちろん、比較的小規模ではあるが近代日本の工業化に重要な役割を演じた鉱山(例えば硫化鉄鉱の産出で知られた岡山の柵原鉱山)など、それほど知られていない所に古を偲ぶ場所がたくさんあることも知った。ちなみに最近では公立の歴史博物館でも優れた展示が多い。柵原鉱山を訪れた折に観た津山洋学資料館では江戸後期日本の科学の高い水準を知って感動したものだ。

こうした旅によって戊辰戦争についても意外な事実に出合った。

東北での戦いについては多少読んでいたつもりだったが、因州藩の幕末における微妙なポジションについては鳥取市歴史博物館を訪ねた時に初めて知った。因州藩は、藩主池田慶徳が將軍徳川慶喜と同年の異母兄であったことも影響したのだろう、「尊王敬幕攘夷」という微妙な立場をとっていた。だが一旦、戊辰戦争が始まると、家老和田老岐率いる八百人の藩兵が官軍(東征軍)に従軍・参戦している。戊辰戦争



平成30年1月に発見された西郷隆盛白筆の書状。戊辰戦争前の慶応3年12月24日付で、西郷が岡山藩家老の土倉正彦に宛てた。徳川家と深い関係のあった因州藩が新政府側につくのかを確かめる内容が書かれている。因州藩が戊辰戦争で新政府側に戻った経緯はこれまで明らかになっておらず、この書状により、薩摩藩の動きかけが影響した可能性が示された。鳥取市歴史博物館蔵



因州藩最後の藩主池田慶徳(明治初年撮影) 鳥取市歴史博物館蔵

のこうしたさまざまな事例に触れたのは、津山から柵原、智頭を通って鳥取市に出た旅のことだった。

幕末維新ということになると、どうしても薩長、土肥、京・大坂、江戸の三都に関

心が集中する。最も政治的動きが激しかった地域であるから当然のことではあろう。しかし広く日本を旅すると、それぞれの地域に、まさにそれぞれの幕末維新があったことが実感できる。書物から学ぶことは多いが、旅によって学ぶことも多い。「世界は書物であり、旅をしない人は、そのわずか一ページしか読んだことにならない」という賢人アウグスティヌスの言葉はけだし名言と言えよう。

西南雄藩の下級武士の改革へのエネルギーは、経済が相対的に豊かであったために生まれたという面と、平田派国学の尊王思想の浸透によるという二つの側面があったのではなからうか。

こうした政治や生活への人間のエネルギーに関してもう一つ思い出すことがある。周知のように、明治二十年代に日本からのハワイ・北米への移民を輩出した地方では、山口と広島が群を抜いて多い。移民研究では、一般に移民する社会グループは、その社会の最も貧しい層ではなく、その少し上の社会階層に多いといわれる。海外に活路を求めようとするエネルギーと、ある程度の資力がなければならぬからだ。この点は明治中期の鳥取から北海道・釧路への土族移住にも当てはまると思われる。いずれにしても飛躍を求めるエネルギーのある人々がそれらの地域に多かったと言えるのではないか。

歴史上の問いに答えるには史料が必要だ。しかし史料には制約があり、全てが実証できるとは限らない。明治維新の問題を考える場



ハワイのバナナ農園で働く日本人労働者たちを描いた油絵(ジョゼフ・ドワイト・ストロング作、1885年)。日本人が移民として初めてハワイに渡ったのが明治元年。明治維新150年の歴史は、日系移民の歴史にも重なる

profile

猪木 武徳(いのき・たけのり)

1945年滋賀県生まれ。経済学者。京都大学経済学部卒業、マサチューセッツ工科大学大学院博士課程修了。大阪大学経済学部教授、国際日本文化研究センター所長などを歴任。著書に『経済思想』(岩波書店、サントリー学芸賞)、『自由と秩序―競争社会の二つの顔』(中央公論新社、読売・吉野作造賞)、『戦後世界経済史 自由と平等の視点から』(中公新書)、『文芸にあらわれた日本の近代―社会科学と文学のあいだ』(有斐閣、桑原武夫学芸賞)など。

※1…経済学者のマルサスは「人口論」で人口は幾何級数的に増加するが食糧は算術級数的にしか増加しないため貧困と悪徳が発生し、この両者が人口増加の抑制要因として働くと言った

※2…復古神道を説いた平田篤胤が樹立し、その養子の狭風、孫の延胤によって維持発展された学問

幕長戦争の光と影

広島大学名誉教授 三宅 紹宣

ペリー来航後、西洋列強の圧力に屈して開国に応じた幕府に対し、不満を抱いた人々の間で尊王攘夷運動が巻き起こる。幕長戦争で敗北した幕府は権威を失い、長州藩と薩摩藩は討幕運動を進め、やがて大政奉還、王政復古の大号令へとつながっていく。人数で劣る長州藩はなぜ勝ったのか。中国地域が舞台となった幕長戦争の足跡を追う。

近代日本の夜明け

明治維新とは、江戸幕府が支配する封建体制を倒して近代国家を造った大きな変革過程である。幕府が倒れる契機となったのが、幕府が長州藩（現・山口県）を攻撃した幕長戦争である。この戦争は、両交戦団体の名をとって幕長戦争と呼ぶ。ほかに長州戦争、あるいは長州藩の四つの藩境で起こったことから四境戦争という呼び方もある。慶応二（一八六六）年、幕府は長州藩を攻撃したが敗退し、権威を大いに失墜した。幕府を見限る勢力が強くな

り、この動きは、慶応三（一八六七）年十二月、幕府の倒壊と維新政府の成立につながってくる。その意味で幕長戦争は、「近代日本の夜明け」とも言われている。幕長戦争を引き起こした直接の目的は、元治元（一八六四）年の禁門の変を起こした長州藩の責任を追及することにあつた。この対立は、さらにさかのほれば、対外方針をめぐる両者の考え方の違いにあつた。幕府は、嘉永六（一八五三）年のペリー来航以降の西洋列強による圧力に対して、戦っても負けるとして、言わ

※1 禁門の変…元治元年、勢力回復を図る長州藩が京都に出兵し、会津・薩摩などの藩兵と戦って敗れた事件



藩校明倫館、松下村塾で学び、改革派の中心となった高杉晋作。幕長戦争では小倉口の戦いで指揮を執ったが、慶応3年に病死した。写真提供：国立国会図書館デジタルコレクション

れるままに不平等な条約を結んだ。それに対して長州藩は、それでは主権国家としての独立が保てないとして、まず対抗して、その上で主体的に条約を結ぶべきだと批判した。十九世紀は、文明国が半文明国を植民地化するのは合法とされた時代である。半文明国と位置付けられた日本は、西洋列強に抵抗しない場合、容易に植民地にされる危険性があつた。この対外方針の違いは、明治維新の根本的な対立軸であつた。



幕長戦争の概略図(慶応2年) 出典：『幕長戦争』(吉川弘文館、2013年)

藩は幕府に抗戦する方針に転換した。この動きを知った幕府は、慶応元（一八六五）年四月、再び長州藩攻撃の出兵を諸藩に命じた。さらに五月、將軍徳川家茂自身も江戸城を出て、大坂城に移って陣頭指揮に当たつた。

西側面、背面の三方を遮られたため、窮地に陥り、広島方面へ退却した。長州軍は、散兵戦術を駆使した。この戦術は、兵士を広く散らばらせて行う戦術であり、少数の兵で多数の兵に立ち向かう場合に有効である。一方で、兵士が広く散らばっているため指揮官の命令が行き届かず、兵士各自が自分で判断して行動する自発性が要求された。長州軍は、日頃の訓練で、兵士の自発性と独立心を養うことを目指した。

十一月、幕府は幕府陸軍と諸藩軍に長州周辺への出陣を命じた。これに応じて諸藩の軍は出陣し、広島には幕府陸軍、彦根藩軍、越後高田藩軍などが集結し、さらに諸藩の軍も続いた。このようにして、慶応二年六月七日、幕府軍艦の長州藩領の熊毛半島と周防大島への砲撃によって開戦の火蓋が切られた。

六月十四日午前二時、先鋒の越後高田藩軍は、藩境の小瀬川対岸の岩国藩領和木村を目標に大砲を撃ち出した。高田藩軍の先制砲撃によって、芸州口の戦いは開戦した。朝になると、西側の彦根藩軍からも砲撃が始まった。これに対し、長州軍も砲撃で応じた。

大島口の戦い

六月八日、伊予松山藩軍は周防大島の南側を攻撃した。同日、幕府海軍は、周防大島の北側を砲撃した。さらに幕府陸軍と松山藩軍は周防大島に上陸し、占領した。



周防大島町の西蓮寺にある「四境之役大島口本陣碑」写真提供：三宅紹宣

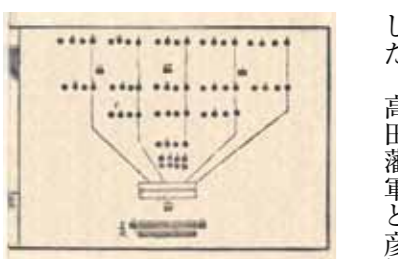
十日、長州藩は応戦を決断し、木戸孝允を中心とする藩行政事堂の統一的指揮の下、少ない人数を四つの藩境



藩主の毛利敬親は幕末に藩庁を萩から山口へ移した。藩庁は政事堂とも呼ばれ、現在の県庁が立つ敷地にはその門が残る。写真提供：一般社団法人山口県観光連盟



大島口の戦い要図 出典：『幕長戦争』(吉川弘文館、2013年)



散兵戦術の教科書である『長門練兵場蔵板活版散兵教練書』の散兵前方展開。1分間に180歩のスピードで前に進みながら、広く散らばっていく。山口県立山口図書館蔵



広島県大竹市小方の西念寺には、芸州口の戦いの砲撃で折れた肘木(ひじき)が残る。写真提供：三宅紹宣



芸州口の戦い要図 出典：『幕長戦争』(吉川弘文館、2013年)

散兵戦術は、密集戦法しか使えなかつた。散兵戦術は、アメリカ独立戦争で用いられるようになった新しい戦法である。アメリカ植民地

の人たちは、自発的に軍に加わり、自在に動いて、装備は立派だけれども動きの鈍いイギリス正規軍を攻撃した。散兵戦術を採用するためには、兵士の意識を改革することを必要とし、農民・町人も含む有志が志願して編制した士気の高い奇兵隊などの諸隊において、初めて実行可能な戦術だった。

長州軍は、さらに北の大野村を攻撃した。やがて大野村は長州軍が占領した。しかし征長軍も反撃を開始し、七月二十八日、大野村へ向けて進発し、激戦が行われた。三十日、征長軍の攻撃により、大野村は再び征長軍の支配下に入った。八月二日、征長軍はさらに大野村から進撃し、幕府軍艦は、玖波、小方村を砲撃した。

八月七日、長州軍は、大野村とそこから北の宮内村に屯集している征長軍を攻撃した。宮内村の征長軍は、油断していたため十分な応戦ができず、敗走した。大野村の征長軍は、長州軍によって背後を切断される形となり、危険を感じて、九日にことごとく広島城下へ撤退した。

七月二十日、將軍徳川家茂が大坂城で死去した。その後、徳川家を相続した徳川慶喜は、自ら出陣して長州藩を討つことに強い意欲をみせた。しかし、苦戦が続いているのを聞いて突然辞退

小倉藩は、小倉城に火を放ち、その中を南に向かった。以後、小倉藩は、防備を固め、ゲリラ戦を展開した。九月、芸州口・石州口方面では兵を解く命令が出たが、小倉藩は抗戦を続けた。しかし徐々に追い詰められた。小倉藩は休戦を申し出、慶応三年一月二十三日、長州藩と小倉藩との和議が成立した。同日、幕府から兵を解く命令が発せられ、幕長戦争は終結した。

長州藩が幕府・諸藩の大軍に勝利した要因

幕長戦争は、西洋式兵器をそろえた長州藩が、旧式兵器のままの幕府・諸藩の軍を破ったとみられてきた。しかし、戦争の過程を詳細に見ていくと、幕府陸軍や和歌山藩軍の西洋式兵器は、長州藩の兵器と互角のレベルであり、とりわけ海軍力においては、幕府海軍は、当時最新鋭の大型蒸気軍艦をそろえており、長州藩海軍を圧倒していた。しかるになぜ長州藩は勝利することができたのか。それは、長州軍が散兵戦術など西洋式戦法に習熟し、それを十分に使いこなしたという点、つまり封建的な階層を改編することにより新しい軍を作り、実力主義を貫くことにより兵士の活力・自発性を引き出したことにある。

を申し出、出陣は中止された。

慶喜は、軍艦奉行勝舟に命じ、長州藩との止戦交渉を図らせた。九月二日、勝は厳島の大願寺において長州藩代表と会談し、休戦が締結された。これを受けて九月四日、芸州口、石州口の征長軍に兵を解くことが命じられ、諸藩の軍は次々と広島を離れた。

石州口の戦い

六月十六日、長州軍は浜田藩領益田を攻撃し、ここを準備する福山藩軍・浜田藩軍と交戦した。十七日、長州軍は、本格的に益田へ進軍した。激戦が展開されたが、午後三時ごろに至り、福山藩軍・浜田藩軍は退却し、代わって長州軍が益田に入った。

長州軍は、ここでも散兵戦術を駆使した。対戦した福山藩士は、「長州軍は広く散らばることにより、少ない人数でも多人数のように見えてしまう。これまでの密集隊とはスピードが全く違い、見たこともない速さである」と驚きをもって記述している。

益田を退却した征長軍は、城下町浜

戦い方の違いに両者の性格の差が明確に表れており、近代国家を目指す長州藩が、封建体制の維持を図る幕府・諸藩を破ったのが幕長戦争といえる。

戦争後の諸藩

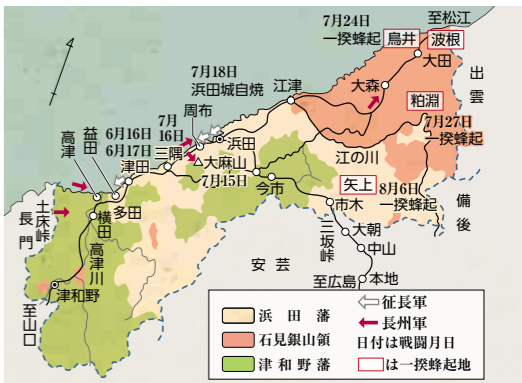
幕長戦争は、戦争後の諸藩にも大きな影響を与えた。明治元（一八六八）年を迎えたそれぞれの地域で、さまざまに明治維新があった。

戦場となった広島藩は、後方警備に回ったため、直接長州藩と交戦することなく、戦後は長州藩と接近していく動きをとった。これはやがて薩摩・長州・広島藩が協力して出兵する同盟となり、討幕運動の一翼を担うこととなった。

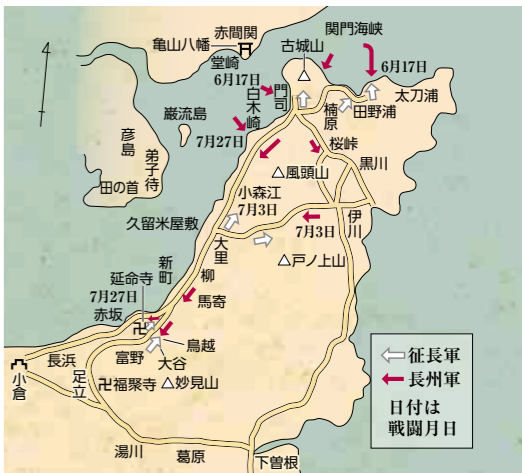
城を自ら焼いて撤退した浜田藩の藩主と家臣八百余人は、松江藩を頼って松江に身を寄せた。慶応三年に幕府は、離れた領地であった美作国の鶴田に領地を移させた。明治元年には、維新政府から美作国内に二万七千石余りが預けられ、その年貢を与えられた。しかし、ついに浜田に帰ることなく、明治四（一八七二）年の廃藩置県を迎えた。鳥取藩、岡山藩は、尊王を尊重しつつ、一方で幕府寄りという複雑な立場をとったが、早い段階で維新政府側についた。



征長軍が立てこもった鳥根県益田市の万福寺に残る弾痕
写真提供：三宅紹宣



石州口の戦い要図 出典：『幕長戦争』（吉川弘文館、2013年）



小倉口の戦い要図 出典：『幕長戦争』（吉川弘文館、2013年）

田の南西に浜田藩軍、和歌山藩軍、福山藩軍、松江藩軍、鳥取藩（因州藩）軍を配置して、陣容を立て直しを図った。しかし、七月十六日、長州軍はその防備陣を打ち破って進撃し、征長軍は浜田城下に総退却した。

十八日、浜田藩主が浜田城を退去したことを知った諸藩の軍は、浜田から撤退していった。浜田藩は単独での防戦は困難となり、自ら城を焼き、浜田から退去した。

小倉口の戦い

六月十七日朝、長州藩海軍は、関門海峡対岸の小倉藩軍をめがけて砲撃した。次いで奇兵隊などが上陸し、小倉藩軍と交戦し、敗退させた。

長州軍は、小倉口の戦いでも散兵戦術を駆使した。軍艦を率いて長州軍に加わった坂本龍馬は、散兵戦術の有効

松江藩、福山藩は、幕府寄りの立場を続けたが、維新政府の圧力によって維新政府側につくことになった。

幕長戦争は、各藩においても軍の出陣や参戦、従軍する農民の動員など大きな影響を与えた。戦後の各藩はさまざまな政治方針をとったが、慶応三年十二月に幕府は倒れ、明治元年九月には全ての地域（ただし北海道はまだ）が維新政府側に立つことになった。

幕末以来、幕府を批判してきた勢力は、独立を保つための強力な国家の建設を目指していた。そのため、一国の中に小さな政府がたくさんあるような藩はなくすべきだと考え、明治四年に廃藩置県を断行した。これにより藩は消滅し、中央集権の近代国家の体制が成立したのである。

幕長戦争から学べること

幕長戦争は、小さな勢力の方が大軍を破った。物量に勝る方が勝利するのが通常である歴史上では、極めて稀な戦争である。長州藩は大軍を迎え撃つために、最大限の工夫と努力を行った。最も注目される点は、封建的な階層にまで踏み込んで改革を徹底し、農民・町民なども含む全ての人々の活力を引き出したことである。これは一方では、武士の既得権益を取り上げることにつなが

性を高く評価している。

七月三日、長州軍は対岸の大里を攻撃し、小倉藩軍は敗走した。

七月二十七日、長州軍は小倉城下町に入る要衝の地である赤坂を攻撃した。守備する熊本藩軍は、高地に砲台を築き、地形の有利なことを利用し、大勢で防ぐため容易に攻め落とせなかった。長州軍は、不利な地形の中で無理な力攻めをしたため、多大な戦傷者を出した。しかし戦意は衰えなかった。

三十日、熊本藩軍は突然防備している場所からの引き揚げを開始した。熊本藩のみでの単独戦に陥ることを恐れたためである。さらに征長軍の総指揮者は、小倉の陣営を脱出し、諸藩軍も次々に撤退の動きを開始した。

小倉藩は、孤立状況となったので、一旦小倉城下を退いて、内陸部に移って抗戦することに決した。八月一日、

どんな組織でも、その中にいる人々の活力が発揮されなければ強くなる。これは現在にも通じる鉄則である。幕長戦争で実際に展開されたさまざまな場面を振り返ると、その鉄則を実感できる。これは、実験を積み重ねてデータを分析するのと同じであり、振り返る意義は大きい。

また、幕長戦争は、各藩、各地域に多様な影響を与えた。幕府を支持した藩は、その方が藩のためには安全だと判断したのであるが、時代が近代に向かっているという動きが読めていなかった。もちろん近代国家になっても一挙に民主主義社会ができあがったわけではない。多くの陰の面があったことは厳然たる事実である。その面も含め、各地域の歴史を振り返り学ぶことは、未来を考える人々に示唆を与えるであろう。

profile

三宅 紹宣（みやけ・つぐのぶ）
1949年広島県生まれ。山口県立山口博物館、宇部工業高等専門学校、広島大学大学院教授を経て、2015年に同大学名誉教授。博士（文学）。山口県史編さん委員会委員。著書に『幕末・維新时期長州藩の政治構造』（校倉書房）、『幕長戦争』（吉川弘文館）など。NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の時代考証を担当。

備後地方で繊維産業がなぜ発展したのか

国士舘大学 教授

阿部 武司

江戸時代末期から綿織物産地となった備後地方は、明治に入ると備後綿で全国に名が広まり、繊維業の一大産地として発展する。明治期以降、備後地方はどのように変貌してきたのだろうか。

幕末に生まれた備後綿

備後地方(現在の福山市を中心とする広島県東部)は、江戸時代末期に綿織物産地として頭角を現し、昭和初期に織物から縫製品の産地へと変貌してい



備後綿は、江戸時代は唐系緋、有地緋、谷迫緋などと呼ばれたが、明治初年から新しく備後綿の名で全国に出荷されていった 写真提供:広島県

しながら備後の産地問屋は明治期に全国を股にかけた活動を行っており、代表的な問屋の佐々木商店は、明治末(一九二二)年ごろには行商活動を通じて、山陽、山陰、四国を中心としながら、北は北海道から南は福岡県まで、さらには朝鮮半島に至る広大な販売ルートを持ち、縮木綿、紺木綿、緋を各地の農村に販売していた。

大正バブルと軍服需要

第一次世界大戦は、大正バブルとも呼ばれる好況をもたらし、備後の織物業もその恩恵に浴した。戦後の大正九(一九二〇)年以降、不況が慢性化したものの、主に地方の農村で消費されていた備後織物は、大正末年(一九二〇年代半ば)まで続いた全国農村の高賃金に支えられて、他産地の苦境をよそに繁栄し続けた。ところが、昭和二(一九二七)年の金融恐慌以後三十年代初頭の昭和恐慌まで、備後で作られる伝統的な紺・緋の各綿織物の日本国内での売れ行き



近代移行期に普及した高機(たかばた)(上)と備後綿の特徴の一つである井桁模様(下) 写真提供:福山市しんいち歴史民俗博物館

き、中国などからの低廉な製品の輸入により深刻な打撃を受けるようになる。近年までは、全国でも有数の縫製品の産地であった。この地域で繊維産業が息の長い発展を遂げられたのはなぜだろうか。備後の織物業と縫製業の歩みを振り返って、この問いに答えよう。

備後では江戸時代に織物業の基礎が築かれた。この地域は、気候が温暖で土地も肥沃であった上、元和八(一六二二)年に福山城を築いた大名、水野勝成の施策も与って綿作が広範に展開した。農民は、綿の実が熟成した綿花から種を除いて繰綿にし、糸車を使って繰綿から綿糸を紡ぎ、織機にその糸をそろえて織

は甚だ振るわなくなった。

昭和初期の不況に対して、まず力織機工場化を達成した備後南部では機屋(機を織る職業)の団体である工業組合が県立の工業試験場と組んで、当時普及し始めていた人絹と綿糸の双方を用いた交織物、さらには人絹織物を和服用に開発した。さらに大阪や東京のデパートで展示会を開いてもらい、その販売に努め成功を収めた。

他方、問屋制家内工業による緋製造を中心とした備後北部では、機械化が困難とされていた緋製造用の力織機が一九三〇年代半ばまでに開発され生産性が高まり、緋の先進地の福岡県久留米や愛媛県伊予にも伝播した。同じく北部では産地問屋が、従来の織物販売に加えて、ミシンを備えた新設の小工場を組織し、それらから買い集めた農村向けの下着や野良着といった縫製用品、すでに持っていた織物の全国的行商網に乗せて地方の農村に販売するようになった。現在アパレルといえは、高級でファッションナブルな既製服を想像しがちであるが、日本のアパレルは、以前から生産がなされていたとみられる東京や大阪のような大都市を除けば、昭和初期の備後で不況対策としての日常的な衣類の製造・販売から始まったのである。備後の縫製工場は昭和十二(一九三七)

物を織るようになった。彼らは、綿布を当初は自給用衣料の材料としていたが、やがて作られた綿布を買い集める商人が登場し、近隣から西日本一帯に綿布を売るようになった。加えて、神辺には本陣(江戸時代に大名や旗本などが泊まった宿場の宿泊施設)が置かれ、しばしば訪れる参勤交代の大名一行の荷物持ちの人らに綿織物がよく売れたと言われ、また福山の古着も船によって東北や九州にまで販売された。さらに幕末には、現在の府中市で富田久三郎が新種の緋を発明し、後に備後綿として有名になる。しかし、この地域の繊維産業が本格的に発展していくのは、明治期以降のことであった。

明治期に始まった工業化農村工業のまま発展した備後地方

明治期半ばに全国的に始まった工業化(人力以外の水力や蒸気力、後には電力により動かされる機械を備えた工場で行われるモノづくりが経済発展を牽引すること)は備後地方にも及び、水呑村など南部では、力織機を据えた中小工場が設立され、ドイツなどから輸入した硫化染料も採用されていた。この南部は後の大正・昭和初期に備後の発展を推進する一地域となるが、新

年の日中戦争勃発後、軍服需要に支えられて増加し、特に太平洋戦争期には陸軍被服廠広島支廠の指令により、多数存在していた中小規模の縫製工場の企業整備が実施された。従来それらの工場を統轄していた産地問屋は自由な活動ができなくなったものの、備後の縫製業の技術水準は軍の厳しい指導の下で大きく向上し、それが戦後の発展につながった。

敗戦後、備後の織物業と縫製業は復興し、産地問屋は再びそれらの組織者(まとめ役)となり、縫製業者も企業整備以前の独立的な状態に戻った者が多かった。そして、備後は労働者を中心とする日本有数の縫製基地となり、特に合成繊維製造が目覚ましく展開した高度成長期に産地問屋は商人、旭化成、東レ、クラレ、東洋紡などの合繊大手各社の系列下に入り、好況を享受した。備後北部で展開してきた伝統的織物のうち備後緋も、田植着などとして昭和三五(一九六〇)年ごろまで需要が増加していた。

社会が変動する中でイノベーションを重ねた備後地方

備後繊維産業の柱であった織物業と縫製業の歩みを概観した上で、備後の繊維産業が発展した理由をまとめると以下のようになる。備後の繊維産業は、



1960年代半ばごろの備後地方の地図 出典:『織物からアパレルへ―備後織物業と佐々木商店―』(大阪大学出版会、2012年)

市町などの備後北部では、工場制は広まらず、問屋制家内工業が第二次世界大戦後まで生き延びた。備後は、農村工業としての色彩を色濃く保ちながら発展するという、全国でもユニークな織物産地であった。

ただし、明治期の備後織物業は常に順調な発展が続いたわけではない。現在では衣類のほとんどは既製服で、その大部分は数年で使い捨てられてしまふ。しかし、戦前はもちろん敗戦後約十年間までの生活水準が低かった時代には、衣類は今の家電製品と同じく簡単に捨てられず、繰り返し大切に使用される耐久消費財だった。明治二十年代のような好況期には人々は財布の紐を緩めて美麗な衣類を競って購入したものの、明治三十年前後のように不況がひとたび到来すると、すぐに購入を控えた。そのため戦前の不況期には国内向けの織物がまったく売れない状態がしばしば生じ、しかも長引いたのである。そうした苦難にたびたび直面

①綿作に由来する織物業の基礎固めを江戸時代に終えた上で、②産地問屋が、明治期にすでに織物の全国的販路を確立した。③昭和初期の不況期に新興の縫製業の組織化を開始した産地問屋は、織物の販売網を基礎として、全国の農村に縫製品を販売していった。④戦時期に陸軍に統轄された備後縫製業は、軍の指導により技術水準を大きく向上させた。⑤敗戦後、備後の縫製業と織物業は、内需が急激に拡大する中で、それまでに培ってきた製造・販売両面での力量を発揮し、特に労働者などの縫製基地として二十世紀末まで息の長い発展を続けたのであった。備後の繊維産業は、このように明治期以降の政治・経済の変動の中で、ビジネスチャンスを見失わずにイノベーションを重ねていったのである。

profile
阿部 武司(あべ・たけし)
東京都出身。国士舘大学教授、大阪大学名誉教授。経済学博士。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。専門は近代日本経済史、経営史。特に、産地綿織物業を中心とした日本綿業の経済史および経営史、大阪を中心とした関西地域とイギリス・ランカシャー地域の比較経営史、戦後日本の通商・貿易政策、企業家史などを研究している。主な著作に『日本における産地綿織物業の展開』(東京大学出版会)、『Region and Strategy in Britain and Japan: Business in Lancashire and Kansai 1890-1990』(Routledge社)、『近代大阪経済史』『織物からアパレルへ―備後織物業と佐々木商店―』(以上大阪大学出版会)、『大原孫三郎 地域創生を果たした社会事業家の魁』(PHP 研究所) など。

※2 企業整備…国家が諸企業を整理・統合し、再編成すること

※1 問屋制家内工業…綿織物業においては、産地問屋が原料綿糸を農家に渡し、納期になるとそれらから代金と引き換えに綿布を集めた

明治教育の継承と変革

岡山大学大学院准教授 梶井一暁

藩校や私塾に加え、寺子屋（てなうい）が広まった江戸期から明治期に移ると、国民教育を支える方法として、現在の授業形態に近い「一斉教授」きよせいが取り入れられる。明治維新から一五〇年、教育はどのようなように変化してきたのだろうか。

一 授業の原型—明治と現在

現在の学校での授業形態は、明治初めに形づくられ、定着したものである。史料をさかのぼって見ると、今とほぼ同じ授業形態を明治期に確認できる。

明治六（一八七三）年発行の師範学校の教授法書（*図1）を見ると、教師



図1 師範学校の教授法書に図説された一斉教授の方法。師範学校は戦前の教員養成学校で、現在の大学教育学部や教育大学にあたる。 明治5年に東京に設置されたのが最初で、その後各府県に置かれた 出典：『師範学校小教授法』（雄風舎、1873年）

が前に立ち、集団として子どもに向き合って教える一斉教授の方法が図説されている。一斉教授は産業革命期のイギリスで開発され、日本へはアメリカを経由して導入された。今では当たり前になっていない一斉教授であるが、明治期では最新の方法だった。この新しい教授法を実践するのが、師範学校で養成される教師であった。

小学四年の書き方（習字）の授業と思われる明治二十三（一八九〇）年の写真（*図2）からは、教師が黒板で児童に書き方を教え、筆記を指示した後、自身は机間指導に向かった様子が見てとれる。児童はみんな教科書の同じページを開き、同じ箇所を書こうと

一斉教授を当たり前と思いついてかを示している。近代の新方法であった一斉教授は、一五〇年を経てそれだけ私たちに浸透したといえるし、一方で拘束しているともいえる。

一 国民教育の時代

明治四（一八七二）年に文部省が設置され、翌年に学制が公布された。日本における最初の近代教育法令である。以後、教育令、諸学校令などが制定され、現在は教育基本法が定められている。

学制は、全ての国民は六歳になったら学校に通うという国民教育（義務教育）（*2）を目指すものであった。寺子屋に自由に通うのとは違う。国民教育を行う場たる学校では、教育方法として一斉教授が採用された。一人の教師がより多くの子どもに教え得る効率的で合理的な方法が一斉教授だった。寺子屋の個



図5 寺子屋のイラスト 出典：内藤昌「江戸の町（下）巨大都市の発展」（草思社、1982年）



図6 福沢諭吉を風刺した「躍ッ蛙」 出典：『団団珍聞』1877年5月26日号

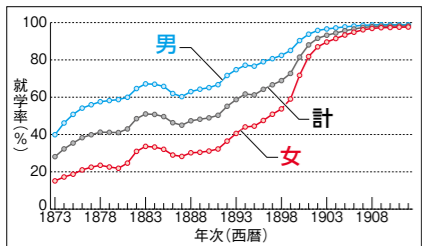


図7 明治期の児童就学率の推移 出典：文部省編「学制百年史」（帝国地方行政学会、1972年）から作成

している。一斉教授法が実践されていることが分かる。この写真は、東京大学のお雇い外国人教師で、大森貝塚の発見でも知られるエドワード・モースが、日



図2 明治23年ごろの習字の授業風景。モースの日本滞在中の収集物はアメリカのピーボディ・エセックス博物館に所蔵されている

本滞在中に収集したコレクションから一枚である。モースが観察するよう、明治初めに始まった一斉教授は、二十年代には定着しつつあった。そして、現在の授業（*図3）を見てみる。小学三年の国語である。教室の環境や服装は異なるが、明治期の一斉教授を基本的に引き継いでいる。今の授業が、明治初めに始まった授業の延長線上に成立していることが分かる。

一 江戸の授業

その前の江戸期はどうであったか。十九世紀初頭の寺子屋の絵（*図4）からは、師匠と十一人の寺子の姿が見える。師匠の近くの二人は読書（素読）の指導を受ける子で、一人は直接指導を受け、もう一人は順番を待っている。筆を持つ他の九人は机に向かい、手習（習字）を行っている。よく見ると「松竹」「いろは」など、個々が異なる文字を書いていく。入門間もない子から上級の子まで進度の異なる子が、個々



図4 江戸期の寺子屋の例 出典：脇坂義堂『撫育草』（1803年）

の進度に応じて異なる手本を師匠からもらい、文字を練習する。そして、清書し、師匠の指導を受け、次の手本に進む。寺子は同じ部屋に居て場を共有しつつも、個々に練習し、個々に指導を受ける。寺子屋では個別教授が指導の基本方式であった。

周知の通り、寺子屋は民間で発達した教育施設である。従来、その数は全国で一萬〜二万軒と把握されていたが、近年の研究では四万〜五万軒と推計されている。この数は現在のコンビニの数に近い。江戸期は「教育爆発」の時代ともいわれる。藩校や私塾に加え、任意の教育施設である寺子屋がこれほど身近に普及していたと考えられると、江戸期の教育熱の高さがうかがえる。

一 教育の変革

二十一世紀の教育課題の一つは、アクティブ・ラーニング（AL）の実現である。ALは子どもが授業に能動的に参加し、個人の活動や仲間との協力を通じて課題を解決し、深い学びを得ることを目指す。ALの提案の背景には、従来の一斉教授は教師中心であり、子どもが受け身の「覚える授業」に陥っていたことへの批判がある。子ども中心の「考える授業」への転換が要請されている。もちろんこの一五〇年、一斉教授一辺倒だったわけではない。グループ学習や体験学習も取り入れられてきた。しかし、一斉教授に依存してきた側面は否めない。教師の「教え」と子どもの「学び」をどう発展的に結びつけていくか。教育の過去はその未来を考える基盤となるはずである。



図3 現在の小学校での授業の様子

参考文献（図で使った文献以外）
慶應義塾編『福沢諭吉全集5』（岩波書店、1959年）
江森一郎著『「強勉」時代の幕あけ：子どもと教師の近代史』（平凡社、1990年）

profile
梶井一暁（かじいかずあき）

広島大学大学院修了。鳴門教育大学を経て、現職。博士（教育学）。専門は教育史。著書に『映画のなかの学びのヒント』（岐阜新聞社、2014年）など。



緑化を通じて環境保全に貢献する

日本植生株式会社 代表取締役社長 柴田 明典 〈岡山県津山市〉

自然豊かな津山に立つ本社

古くは美作国^{みまさか}の中心地で、江戸時代には城下町として栄えた岡山県津山市。岡山駅と津山駅を結ぶJR津山線の佐良山駅^{さらかやま}から見える近代的な建物が日本植生株式会社の本社である。山々に囲まれたのどかな風景の中でひとときわ立つこのビルに足を踏み入れると、同社の製品や工法を紹介する展示コーナーが目に入る。この模型を前に、企業家は製品の違いや工法の利点を丁寧に説明してくれた。日本植生の柴田明典社長である。

1966年に本社正面に建立された植生神社。万物の育成を司る神々がまつられている。年3回植生神社祭が執り行われる



エレベーターで五階に上がると、広々とした社員食堂に着く。外に対して開かれたこの明るい空間では、山の青々とした緑が一斉に目に飛び込んでくる。国土の三分の二を森が占めるわが国では、この景色は当たり前のよう存在していると思えるが、決してそうではない。戦争からの復興、高度経済成長期の国土開発、災害対策としての土木工事などのたびに緑化が図られてきた。その緑化の歴史と重なり合うのが、同社の歴史である。

緑溢れる社会を目指し 緑化事業のハイオニアに

日本植生は、明典社長の祖父にあた

る柴田正氏^{まさし}が一九五一（昭和二十六）年に久米町（現・津山市）で創業した。海軍の一員として太平洋戦争に参加した正氏は、終戦後、荒れ果てた山や大地を見て愕然とする。「この国を再び緑でいっぱいにしよう」と思い立ち、代々受け継いだ田畑で苗木の生産を開始した。食糧や収入のため、ほとんどの人が米や野菜を植える中、正氏はヒノキやスギの苗をコツコツと植え始めた。

この柴田農園が日本植生の原点である。苗木は、造林に用いるだけでなく、開発地や崩れやすい山の斜面（のり面）に植えることで、土砂崩れを防ぐ治山の効果がある。造林用、治山用の苗木を生産・販売する柴田農園の名は次第に広まり、苗木の注文が増えていった。その中で、正氏は「植生盤工法」という画期的な緑化の工法を耳にする。これは、化学肥料と土を水で混ぜ合わせて一定の型枠に入れ、表面に種子をまいた後、保護紙をおいて機械で圧縮し、ブロック上のパーツを作り出す工法である。これを並べて道路や堤防などののり面を形成すると、崩れずに安定すると言われていた。

この植生盤工法の特許を持っていたのは、群馬県前橋市の営林局の技師、川端勇作氏である。正氏は、この特許技術を使わせてもらおうと、前橋市の

川端氏の元へ足しげく通った。民間企業には許可できないと当初は拒んでいない昭和三十年前半に年に十回も訪れてくる正氏の熱意に押され、許諾を決定する。

この植生盤工法により、正氏は緑化事業を全国各地で展開し、八郎潟干拓工事などの国家的プロジェクトにも参加する。一九五七（昭和三十三年）に着工した八郎潟干拓工事では、岡山から社員を連れて現場施工にあたっていたが、遠方の工事のために社員を呼んでは会社が持たないと判断。人手のかかる植生盤工法に代わる緑化の手段として、緑化製品の開発に力を注いでいく。

一九六一（昭和三十六）年に柴田農園を改組し、日本植生を設立した。翌年には、工場生産できる人工芝の「治山用グリーンベルト」「人工芝下ハタイ」を開発する。目の粗い布袋に肥料や種子、土壌などを詰め込んだもので、のり面に設置すると自然に芝が生えてくる。これにより、同社は緑化事業のハイオニアとして、全国から注目される存在となった。

明典社長の物心がつくころには、正氏は社長から退き、仕事の第一線から離れていた。しかし、その熱意ある姿勢は今も語り継がれている。

profile

柴田 明典〈しばた・あきのり〉

1974年岡山県津山市生まれ。麗澤高等学校、学習院大学を卒業後、米国のハイオ大学へ留学。2001年に祖父が創業した日本植生株式会社に入社。営業、新規事業立ち上げを経験した後、2007年に取締役、2011年に代表取締役社長に就任。日本植生株式会社は従業員数180名、売上高65億円。グループ全体の従業員数は700名、売上高200億円

文：城市 奈那 写真撮影：林田 悟（岡山市在住）



日植記念館1階入り口近くには、創業時の精神を後世に伝えるため、当時使用していた道具や日本初の植生盤製造機などが展示されている

「当時の社員から聞くと、創業者の祖父はとても研究熱心でアイデアマンだったようです。ゴルフに行くと、そこらへんに生えている植物を指さしては、それが何かを人に確かめるため、社員からは『社長とゴルフに行くと大変だ』と思われるようです。人にも自分にも研究開発へのシビアさを求めているのではないのでしょうか」と明典社長は話す。

会社設立時から、正氏は自社のオリジナル製品を作ることこだわり、研究開発に力を注いできた。そのシビアな姿勢が会社の礎を作り、緑化事業における同社の地位を確固たるものにした。経験から培われてきた同社の緑化製品は質が高く、バラエティに富み、幅広い支持を得て業界ナンバーワン企業へと成長していった。

祖父の死をきっかけに 米国から戻り、入社

一九八一（昭和五十六）年に正氏が六十歳で社長を退くと、生え抜き社員
の田村勝己氏が社長に就任する。その
田村氏も、後に社長になった父の柴田
和正氏も六十歳で社長を退任し、いつ
しか還暦での退任が日本植生の社長の
慣行となっていた。他の企業に比べると、六十歳での退任は早いと言えるだ



岡山県美咲町にある研究圃場。約10haの敷地では同社の製品や工法が実験的に施され、植生の遷移状況を見ることが出来る。開場した1993年ごろの緑化製品は自然の植生のように土地に馴染んでいる

芝を生産しようと、特許権を持つ日本
植生に接触したことだった。
「そのときわれわれは、のり面緑化・工法
の単一事業しか行っておらず、多角化
を進めたいと思っていたので、特許権
を譲る代わりに、施工権を与えてほし
いとお願いました」

これにより中国地域のスポーツ施設
の施工を同社で担当するようになり、
スポーツ施設事業が少しずつ膨らんで
いった。そうした中で、住友ゴム工業の
グループ会社である日本奥アンツカー
の譲渡を打診された。

これを皮切りに、二〇〇四（平成
十六）年に肥料・農薬・農業資材を販売
する井上商事株式会社、二〇〇六（平成
十八）年に繊維ロープ・産業資材を製造
する株式会社テザック、二〇一七（平成
二十九）年に植物工場でレタスを生産
する株式会社日本農園の全株式を取得。
これまでのM&Aの数は八件に及ぶ。

「M&Aが今のところうまくいっている
のは、運が良かった面もありますが、
当社が多角化を『拡本業』と捉え、企
業や経営者、社員の価値観が私たちと
合うかを重視してきたからではないか
と思います」

同社では、多角化を「拡本業」と呼
んでいる。自分たちの事業の路線から
外れないように業種を拡大していくの

ろう。若いうちに決定権のある立場に
就かせることで、大胆なアイデアで事業
を構想する力を身に付けさせたいとい
う狙いがあったのかもしれない。五代目と
なる明典社長は、二十六歳のときに入社
し、二〇一一（平成二十三）年、三十六
歳で社長に就任した。

津山市で生まれ育った明典社長だが、
学生のころは家業を継ぐ意志をほとん
ど持っていなかった。
「家族は何も言わずに好きなことをやら
せてくれて、特に父からは会社につい
て何かを言われることは一切ありませ
んでした」

野球に没頭し、県外の高校を卒業後、
学習院大学に入学した。スポーツビジネ
スを学ぼうと、大学卒業後に、米国のオ
ハイオ大学に留学した。ちょうど野茂
英雄投手がメジャーリーガーとして活
躍し始めていた時代だ。

オハイオ大学はスポーツビジネスで
定評のある学校だった。米国では大学ス
ポーツが非常に盛んで、クラスメートの
半数以上は、大学のアスレティックデ
パートメントの部署で働くことを志望し
ていた。自分たちの母校が甲子園に一年
中出場しているかのようにスポーツを盛
り上げる。そんな夢のような仕事がある
のだと知った。

「やりたいことも見つかって、それを実
が基本方針だ。また、農業資材関係の
企業は、江戸時代から続く老舗が多く、
後継者不足に陥っていることもM&A
が増えた要因の一つという。

創業時からの事業の柱であった緑化
事業の売上高は、公共事業の減少によ
り、ピーク時の半分以下にまで減った。
それでも、日本植生が一度も赤字に陥
らず、従業員の雇用を守れているのは、
このM&Aがグループ経営においてう
まく機能したからだと言えるだろう。

環境が忘れられつつある今 もう一度緑化の意義を考える

事業規模は小さくなったものの、日
本植生の緑化事業は今も大きな柱と
なっている。特に緑化製品は業界での
シェアがトップクラスで、のり面保護
工事でも緑化製品と同程度の売上高を
誇っている。

「緑化事業はかなり技術が成熟してし
まっているため、創業当時ほど特許の
優位性は発揮されません。しかし、オ
リジナル製品の開発はバイオニアとし
ての当社の役割であると考えており、
今も特許取得を目指して技術開発に力
を入れています」

類似品が生まれやすくなった中でも、
同社の製品や工法が選ばれているのは
なぜか。その秘訣は、緑化を追求して

現する人も身近にいて、自分もそれに
続きたいという思いはあった」と明典
社長は振り返る。

しかし、大学在学中の二〇〇〇（平成
十二年）に、祖父の正氏が他界する。会
社にエネルギーを与えてきた創業者がい
なくなり、会社や家族の変化を感じた。
「当時社長だった父は五十二歳。帰って
こいと言われたわけではないですが、
家族の思いや苦労を感じたときに、放
つておいてはいけなさと責任感が芽生え
ました」

会社を取り巻く環境も大きく変化し
ていた。平成年代からは公共事業が
激減し、このままでは今の従業員数を
保てないことが目に見えていた。「社員
をリストラしない」ことは、創業者から
引き継がれてきたポリシーでもあった。
雇用を守るために、会社をどう発展さ
せるか。明典社長が入社したころから、
同社は事業の多角化を図っていく。

雇用を守るため M&Aで「拡本業」化

二〇〇一（平成十三）年に各種スポーツ
施設を設計・施工する日本奥アンツカー
株式会社（現・日本フィールドシステム
株式会社）の全株式を取得した。

きっかけは、住友ゴム工業株式会
社がテニスコートに使われる砂入り人工
いるからと明典社長は話す。東京ド
ム九個分の広さを持つ、同社の研究圃
場では、優れた緑化技術を追求するた
め、最新の製品・工法を試すほか、多
種多様な植物を展示・観察し、試験が
繰り返されている。

「この圃場にお客さまをお連れすると、
ここまでやっているのかと私たちの取り
組みに納得され、感動して帰ってくださ
います。他社でも似たような製品を作れ
るかもしれませんが、『この素材を使う
と発芽が良くなる』『こういう場所には
こういう工法が向いている』という経験
の積み重ねは、見よう見まねの製法から
は得られないものです。広々とした圃場
を持てるのも、津山にある会社だからこ
そと言えます」

「二十一世紀は環境の時代」と言われて久
しいが、ここに来て世間での環境への意識
が希薄になっていくと明典社長は話す。

「グリーンフラからグリーンインフラ
へという標語が掲げられてきましたが、
相次ぐ自然災害への対応に追われている
ことも一因となって、その意識が薄れて
きています。緑化を通じた環境保全への
貢献は創業時からの目的です。省力化や
軽量化、あるいは災害対策といったニー
ズに対し、わたしたちが培ってきた技術
をどう擦り合わせて環境に貢献してい
くかが、これからの課題だと考えています」



JR佐良山駅近くに立つ本社



見晴らしのいい社員食堂

高品質の電動バイクを生産し、アジアで販売数を増やす株式会社ツバメ・イータイム

《山口県岩国市》

海外で急速に市場が成長している電動バイク。中国企業が圧倒的な強さを見せる中、「岩国から世界へ」を掲げるツバメ・イータイムは、日本企業らしい品質へのこだわりを武器に、ベトナムを中心に海外市場を切り開いている。

エンジン不要の電動バイク「水平分業」で勝機を狙う

ツバメ・イータイムは、石油販売・車両整備事業等を手掛けるツバメグループの一員として、二〇一四（平成二六）年五月に設立された。ガソリンを扱う企業グループでありながら、電動バイク事業に参入した珍しいケースである。設立のきっかけは、二〇一（平成二三）年に大手商社の関連会社が系列のガソリンスタンドで電動バイクの販売を始めたことにある。ツバメ石油株式会社でもそのバイクを販売する中で「これは自社でもつくれるのではないか」という意見が出てきた。「その電動バイクはバッテリーの不具合などで二年後に自主回収されましたが、電動バイクは主にバッテリー、モーター、コントローラーの三つの主要部品からなり、開発が難しいエンジンが不要だという利点がありました。そこで、自社製造・販売を念頭に、整備士らと研究を始めました」と小野哲也取締役は振り返る。

最終チェックを日本で行い高い品質を追求

二〇一〇年代前半、日本国内でもさまざまな電動バイクメーカーが誕生したが、現在も成長し続けているのはわずか数社である。その数社に共通するのは、海外展開に目を向けたベンチャーという点だ。同社も設立当初から海外展開を図り、二〇一四年に韓国支社を、その二年後には百%出資子会社をベトナムに設立した。

「電動バイクのマーケットが未発達な国内に対し、海外、特にアジアはバイク文化が根付いており、ガソリン式か

ら電動式への移行スピードも速く、市場が爆発的に大きくなっています。一方で、『走ればいい』というレベルの粗悪品が流通しているのも実情です。そこで、品質を追求した製品を生産・販売できれば、市場を切り開けると考えました」

海外でのジャパンブランドへの信頼は厚い。部品調達から生産まで全て国内で行うことが理想ではあるが、現実的には難しい。世界の電動バイクの生産台数・販売台数は約六十五〜七十五%を中国が占めているといわれており、ここに世界中のメーカーが集まっているためだ。

「極端な言い方をすれば、『中国なくし

て電動バイクは生産できない」というぐらいの勢いです」

そのため、中国、台湾、ベトナムなどの優良メーカーから部品を調達し、委託工場を組み立てて製品化する体制をとっている。生産工程の六〜七割は海外で行い、その後国内に持ち込んで、工場で最終組み付けと最終チェックを行う。同社では、ヤマハ発動機株式会社や本田技研工業株式会社出身の著名な技術者を顧問に迎え、製品開発や品質改良改善、製造技術指導に当たってもらっている。

「国内で最終チェックをするためだけの工場や人員の確保は、本来なら必要ないかもしれませんが、あえてここにコストをかけることで、品質の追求や細部へのこだわりといった『ジャパントオリテイ』の命が吹き込まれると考えています」

販売とメンテナンス網を築き国内販売数トップに

ベトナムでまず「E-08」モデルを販売すると、二カ月半で八百台が完売し、好評を博した。現在は首都ハノイの中心街の駅前にショールームを設け、認知度向上に力を入れている。二〇一八（平成三十）年には、ベトナムの公安警察へバイク百台の納入が決ま

り、今期は一万四千台の販売を目標に掲げている。

一方、海外展開を進める上で、「このバイクは日本でも走っているか」とよく尋ねられたため、予定を前倒しして二〇一五（平成二七）年から国内展開を開始した。国内で電動バイクを販売する場合、品質基準は海外よりもはるかに厳しい。さらに、国内では電動バイクはあまり良いイメージが持たれていないことも懸念材料だった。

「日本の会社が販売する海外製の電動バイクが不具合を頻繁に起こし、『走らない』『坂を上れない』『バッテリーがすぐ切れる』といった悪いイメージを持たれてしまいました。今もその亡霊と戦っています」

しかし、近年は維持費の安さから、金融機関や新聞販売店、デリバリー業界などの業務用バイクを中心に徐々に導入が増えてきた。エンジンを持たない電動バイクは、オイル交換などのメンテナンスコストがかからない。燃料コストは、ガソリン式のバイクに比べ七分の一まで削減できるという。

同社では、国内展開に向け、製品の安定性を徹底的に高めるとともに、「全国展開にはメンテナンス網の構築



ベトナム・ハノイの中心街にあるショールーム



小野哲也取締役

が不可欠」と考え、二〇一五年にカーコンビニ倶楽部株式会社と、販売とメンテナンスの業務提携契約を締結した。これにより、約千店舗のカーコンビニ倶楽部加盟店が販売とメンテナンスの窓口になった。さらに、二〇一六（平成二八）年には、テラモーターズ株式会社より国内電動バイク事業を譲渡され、現在は約千五百店舗の販売代理店を持つ国内販売台数トップ企業となった。

ベトナムを拠点にASEAN諸国へ展開

他社の業務用バイクの航続距離は三十五〜六十五キロであるのに対し、同社の主力製品「BIZMO II」は百五十キロと圧倒的な距離を誇る。最少五十台からの小ロット生産のため、



主力商品のBIZMO II。航続距離150kmは他社の2.5〜4倍にも及ぶ



ベトナムで発売後2カ月半で800台が完売した「E-08」



今年4月には、韓国のIT企業ティンアイシティ社と業務協約を締結（左が山本朋広社長）。E-モビリティ事業の推進のため技術的、営業的なインフラの構築に協力し合う

潮風が強い地域でも錆びにくい仕様にして、運ぶ荷物に合わせて荷台を変えたりと、要望に合わせた生産も可能だ。こうした強みを武器に、新聞販売店や金融機関への売り込みを進めている。重点を置く海外では、ASEAN内関税撤廃のメリットを生かし、ベトナムを製造拠点としたタイやインドネシアなどへの進出や自社工場の設立を検討している。

「創業から四年目を迎え、海外も国内も準備が整ってきました。これから日本のE-モビリティ企業として先頭に立つて事業展開するためにも、五年後の上場を目指したいと考えています」

資格を持ちながら休職中の潜在看護師らと共に 利用者目線で介護や育児を支援する神戸貴子さん

自らの経験を基に、公共の介護サービスの隙間をカバーする民間の看護・介護・育児サービスの事業を立ち上げた。退職し家庭に入った女性が、看護師や介護士、保育士などの資格を生かし、自ら時間を決めて働ける雇用システムとしても注目されている。



profile

神戸 貴子(かんべ・たかこ)

N.K.Cナースング コア コーポレーション合同会社代表

1974年福岡県生まれ。神戸市の看護学校を卒業後、看護師として勤務。結婚後、2人目の妊娠を機に家庭に入る。2014年個人事業主として「わたしの看護婦さん」を立ち上げる。翌年法人化し、N.K.Cナースング コア コーポレーション合同会社を設立。2018年第1回中国地域女性ビジネスプランコンテスト SOERUで大賞の中国経済産業局長賞を受賞した。

文：山根 み佳（鳥取県出雲市在住） 写真撮影：佐野 明美（鳥取県松江市在住）

二十代で経験した 介護と育児のダブルケア

福岡県で生まれ育った神戸貴子さんは、神戸市の看護学校を卒業後、病院で看護師として勤務した。結婚後女兒に恵まれ、次女の妊娠を機に病院を退職。十五年前に夫の転勤で米子市に移り住んだ。

二人の子育てに追われる中、同市に住む夫の親戚の介護を頼まれ、二十代で介護と育児のダブルケアを経験する。娘の運動会の日に緊急で伯母を病院へ連れて行ったりと、日常の中で胸が張り裂けるような思いをしたことが何度もあった。

「緊急のときにケアマネージャーさんやヘルパーさんに病院受診の付き添いをお願いしても断られてしまうのです。それは介護保険適用外で、家族のすることだと」

介護は、家族がして当たり前。幼児と赤ん坊を抱える神戸さん向けられた「みんながやっていることだから」の言葉は、重い響きを伴って胸の奥底に沈んでいった。

潜在看護師として 何ができるか

それから十年。介護を終えて子ども

たちも無事に成長し、次女が中学三年生になったころ、神戸さんは自分の人生を見つめ直した。

「娘たちは卒業したら都会に出ると言いますし、私も将来自分でできることを見つけなければと思っていました。そのころ、周囲の友人の間では少しずつ親たちの介護が始まっていたのですが、話を聞くと、あれから十年経っても介護の現場は何も変わっていませんでした。当時の大変さを思い出し、私のように看護師の資格を持った、潜在看護師にも何かできることがあるのではないかという気持ちが湧き上がってきたのです」

それまで、自治体の健康診断の現場などで不定期に働いていた神戸さんは、「本格的に始動するならば、今」と、四十歳になった二〇一四（平成二十六）年に米子商工会議所が主催する起業塾に通い始める。そこで起業のアドバイザーを受け、賛同する友人の元看護師と三人で、個人事業主として保険適用外サービス「わたしの看護婦さん」をスタートさせた。

保険適用外の隙間を埋める 介護サービス

「わたしの看護婦さん」は、介護保険や医療保険の対象になっていない病院



天気の良い日に一緒に散歩したり、病院に付き添ったりすることは保険適用の介護ではできない。「わたしの看護婦さん」は、利用者に自由で安心感のある暮らしを提供できるサービスでもある 写真提供：N.K.Cナースング コア コーポレーション合同会社

の付き添いなどの行為を、看護師や介護士の資格を持つスタッフが行うサービスである。その内容は、病院・外出の付き添いから、健康確認の訪問・電話・お盆の準備、墓参りまで多岐にわたる。こうしたサービスを思いついたのは、実際に介護する中で保険の壁や不都合をたびたび実感したからだ。入浴や見守り、掃除や食事の用意など保険適用の介護サービスは、ケアマネージャーが事前に立てたケアプランに

沿って利用することが決まっていた、たとえ当日に気分が乗らなくても変更はできない。また、食事の用意や買い物も本人分だけと決まっておき、明確に線引きがされている。保険適用外の隙間を補填することで、より円滑な介護が実現できると考えた。

しかし事業は、最初からうまく展開したわけではなかった。民間による介護や看護の有償サービスの文化は、米子ではまだ根付いていなかった。

保険適用の介護サービスは、利用しにくい面があっても、一割負担の料金で済む。そこが大きなメリットだ。一方、「わたしの看護婦さん」の料金設定は、病院の付き添いで一時間二千六百元（会員価格）。保険がきかないので全額負担になる。

「形がないサービスだけに、料金設定は悩みました。『受診はワンコインで済む』『声掛けや安否確認はボランティア』という認識が根強いいため、その価値観の転換が難しかったです」

想像した通り、最初は申し込みが少なかった。しかし、次第に遠方に住む家族からの依頼が入り始め、徐々に数は増えていった。

特に需要があるのは病院の付き添いで、専門性の高いドクターの説明も分かりやすく伝えてくれると評判だ。



八百新酒造株式会社

創業 1877(明治10)年
 山口県岩国市今津町3-18-9
 TEL 0827-21-3185
<http://www.yaoshin.co.jp>
 年間生産量 1,400石(252kl/14万升)



凝った装飾が随所に光る本店建物の展示スペース

16 山口県岩国市

雁木ノ式 純米吟醸 無濾過生原酒

おぼろ豆腐

江戸時代、長州藩が生産を奨励し収入源としていたのが、米、紙、塩である。いずれも白いことから「防長三白」と呼ばれた(蠟を加え「防長四白」と呼ぶこともある)。八百新酒造が立つ今津川のほとりは、かつてこの防長三白の物流の拠点であり、船積みされた米や和紙を蔵へ運ぶため、川土手には階段状の船着場があった。この階段状の船着場こそ、銘柄の名となった「雁木」である。

雁木が誕生したのは二〇〇〇(平成十二年)。酒税法の改正で日本酒業界が大きく変わる中、「こだわって美味しい酒を造ろう」と酒造りを模索し、苦労の末に生まれた名酒だ。

昭和後期、水害対策として実施された今津川の護岸工事により、江戸の遺産である雁木は撤去され、周辺の井戸水は変質した。

「他所から水をもらって酒を造ることになり大変でした」と五代目の小林久茂社長は振り返る。その後水質は元に戻り、現在は再び今津川の源流・錦川水系の井戸水を仕込水にしている。

今回紹介する名酒は、定番商品の一つである「雁木ノ式」。加水、火入れ、

る過をせず、搾った酒の持ち味をそのままボトルに詰めた生原酒だ。口に含んだときに鼻から抜けていく含み香が特徴だが、立ち上がる香りは穏やかなため、繊細な味付けの和食に合わせても邪魔にならない。また酸がしっかりとあるため、味付けの濃い洋食とも相性が高い。冷蔵庫から出した瓶が汗をかき始めるくらいのも、十二〜十三℃が最もおいしく飲める温度だという。

この名酒と一緒に味わいたいのが、おぼろ豆腐である。特に岩国市本郷町の湧き水で作られた、なかた豆腐店のおぼろ豆腐は、雁木のうま味や深み、繊細さを際立たせる。「きれいな素地の上に絵を描くようだ」と小林社長も絶賛するこのおぼろ豆腐は、水を探し回っていたころに出合った一品だ。

八百新酒造は社員全員で酒を造り、営業し、販売する。「お客さまの反応が直接分かるため、自覚が生まれますし、酒の改良にもつながっています」と小林社長。毎週社内で試飲会を開き、各々が意見を交わし、次の酒を考えていく。一段ごとに高みを目指し洗練させていく酒造りは、雁木を上る姿を思い起こさせる。

認知症で病状の伝達が難しい場合は、本人に代わって報告書を作成し、家族にメールで伝える。遠くに住む家族にとつては、看護師の資格を持ったスタッフならではの安心感があるようだ。「報告書はメールで送っています。ご家族は空き時間に携帯電話やパソコンでチェックでき、写真で利用者の様子も見られるため、とても喜ばれています」

要望を受け、介護保険サービスも開始

「わたしの看護婦さん」が少しずつ広がるにつれて、「有資格者が携わっているのであれば、介護保険サービスもぜひ始めてほしい」という要望が生まれた。神戸さんたちが介護保険サービスも行えば、利用者は、保険が使える入浴や買い物はケアプラン通りに利用し、それ以外は「わたしの看護婦さん」を利用して、ワンストップの介護サービスが受けられる。サービスの自由度が高まるとともに、在宅で一日最大二十時間の利用が可能になる。

こうした声を受け、翌年の二〇一五(平成二十七年)年にN.K.Cナーシングコアコーポレーション合同会社を設立し、さらに介護保険適用サービスの「メデイカルヘルパーサービス」をスタートさせた。



看護師や介護士などの資格を持つN.K.Cナーシング コア コーポレーション合同会社のスタッフ



「わたしの看護婦さん」を利用することで、遠方に住む家族はより気軽に帰省できるようになり、コミュニケーションが深まる場合が多いという写真提供：N.K.Cナーシング コア コーポレーション合同会社



女性起業家を対象とした第1回中国地域女性ビジネスプランコンテストで、60名以上の応募者の中から中国経済産業局長賞に選ばれた写真提供：一般社団法人中国経済連合会

山根 み佳(やまね みか)

1963年島根県生まれ。フリーライター。淑徳短期大学社会福祉学科卒業。地元のCATVの制作部を経て独立。山陰の文化情報誌「さんいんキラリ」などに執筆。編著『松江の六人衆』(今井出版)。

時間や働き方を自分で選ぶ 新しいワークスタイルの創出

現在、会社ではフルタイムで働く五人を含め、十八人のスタッフが働いている。看護師、介護士がチームとして情報を共有し利用者に接するため、利用者が発するサインに気付きやすく、病気の予防や早期発見につながる好循環が生まれている。また、保育士資格を持つスタッフも同社に加わり、病児保育や見守りなどへとサービスを拡充させてきた。

同社では、子育て世代、自由に自分の時間を使える世代、リタイア世代などそれぞれ異なる人生のステージにいるスタッフが、働く時間やスタイルを自分で選択している。また、年齢層も広く、盆ちようちんの飾り付けや団子

作りには、七十三歳の最高齢スタッフが活躍する。

年齢や得意分野に幅があれば、適材適所のサービスが届けられる。それと同時に、働く場所があつて社会貢献できれば、何歳になつても人は一層輝けると神戸さんは考えている。

「今後の課題は、働きたい人の発掘と育成です。看護や介護の仕事は、ロボットに代えられません。何としても温かい手を届けたい。働き方改革の観点からも、家庭に入っている潜在有資格者に、隙間の時間を利用して働いてもらうのが一番有効だと思います」

神戸さんは、その先見性ある事業が評価され、二〇一八(平成三十一年一月)には、中国経済産業局や一般社団法人中国経済連合会などが主催する「第一回中国地域女性ビジネスプランコン

テストSOERU」で、大賞の中国経済産業局長賞を受賞した。

近年、中国地域では遠距離介護が増加し、都会に住む子どもたちからのSOSを受け取ることが増えているという。親の介護に直面する世代は、介護を理由に休んだり、離職したりすることが難しい人が多い。また、一人や二人で、夫婦それぞれの親を介護するにも限界がある。

「介護は、受ける人のみならず、介護する立場の人がいかに満足できるかも大切」と神戸さんは話す。「わたしの看護婦さん」をはじめとする同社のサービスは、遠方に住む子どもたちの「新しい形の親孝行」ともいえる。介護する側もされる側も満足できる社会を目指し、神戸さんはこれからも多くの人々に安心を届けていく。

奥田元宋

[1912-2003]

元宋と月

奥田元宋の作品には、月がよく描かれる。満月や三日月、あるいは山の稜線に見える光によってその存在を示唆する未だ姿を見せない月。それらは、幾多の山河を訪ね歩き自然の中に身を置いて写生を重ねた画家自身の姿、さらに言えば、風景に注ぐ画家の透徹した視線、魂そのもののようにも感じられる。

奥田元宋(本名・巖三)は、一九一二年(明治四十五年)年、今も豊かな自然が残る広島県の山あいのまち・三次市吉舎町に生まれた。自然に対して人一倍敏感だった巖三少年は、「太陽も雲も月も、手を伸ばせばつかめそうだった」という故郷の地で、生涯のテーマとして追い求めることとなる自然の無限の奥深さをたっぷりと肌で感じ、自身の原風景として心に刻んだ。

画業の始まり

中学生のころから油絵を始め、画家への夢を膨らませたが、美術学校への進学は両親に認められず、遠縁にあたる日本画家の児玉希望に弟子入りすることが辛うじて許された。東京で児玉希望の内弟子となり、一九三六(昭和十一年)年の文展鑑査展に《三人の女性》で初入選。翌々年の第二回新文展では《盲女と花》で特選を受賞した。その後の活躍は目覚ましく、都会に生きる女性や歴史上の人物などを描いて高い評価を受ける。しかし、戦争の激化にともない、一九四四(昭和十九)年、郷里への疎開を余儀なくされた。

一九四五(昭和二十)年八月には終戦と父の死が重なり、また、故郷に移送する予定だったこれまでの大作十数点が空襲によって焼失してしまったこともあり、戦後は深い失意を内に秘めての再出発となった。そのような中、



奥田元宋が奥田元宋・小由女美術館でスケッチをする様子。奥田元宋・小由女美術館提供

眼前に広がる自然の美しさに改めて感銘を受けた元宋は、以後自らを「風景画家」として意識するようになる。

郷里での再出発

戦後もしばらく故郷に身を置きながら、元宋は月をテーマに多くの作品を描いた。その発端は、画室から見た松林の背後から昇る月の幻想的な美しさにあったという。一九四九(昭和二十四)年の第五回日展で特選を受賞した《待月》がその代表的な作例であるが、自分の心情に見合う光景を求め、自転車の荷台にスケッチブックをくくりつけ、必死になってあちこち探し回った結果、この時期に描かれた《月夜》など二連の月の絵は、現在珠玉の逸品として残され、私たちの目を楽ませてくれる。

その後、陽光に照らし出された明るい海岸風景の《花ひらく南房》、絵具の質感を強調したモノクローム調の



《待月》 1949年 広島県立美術館蔵



《花ひらく南房》 1954年 奥田元宋・小由女美術館寄託



《月夜》 1950年ごろ 奥田元宋・小由女美術館蔵

平成に入ってから、赤を基調とした画家の胸中山水(心象風景)を思わせる諸作を連年発表するが、特筆すべ

《磐梯》、といった具合に作風を大きく変換させていく。さらに、昭和四十年代に入ると、明るく穏やかな風景を再現的に描き、その絵画世界に一層の奥深さや親しみやすさを加えていった。

元宋の赤

大きな転機となったのは、鮮烈な赤い絵具によって屹立する山の姿を描いた一九七五(昭和五十)年の《秋嶽紅樹》である。この作品によって元宋は、新たな表現の地平を切り開いた。次第に直接的な激しさは影を潜めながら、自然の中に宗教的な寓意を見いだす静謐さに包まれた風景画へと展開していく。これら一連の作品は「元宋の赤」と称され、画家の代名詞のようにもなった。元宋の絵画の中に再び月が頻出するのも、赤い風景の出現とほぼ同時期である。

大画面の構築

大画面の制作にも精神的に取り組んだ。一九八七(昭和六十二年)年の「幽玄讃歌 奥田元宋展」にあわせて発表された《紅嶺》《白嶺》《春耀》《彩苑》といった大作の数々は、今も圧倒的な迫力で見守る者に訴えかけてくる記念碑的な作品群である。



《紅嶺》 1987年 奥田元宋・小由女美術館蔵



《秋嶽紅樹》 1975年 練馬区立美術館蔵

きはやはり一九九六(平成八)年に完成した京都・慈照寺(銀閣寺)の障壁画(計四十一面)である。画業の集大成とも言えるこの作品の制作には二年余りが費やされた。

幼いころ慣れ親しんだ故郷の風景を原風景として心に刻み、生涯のテーマとして表現し続けた元宋。月のイメージも、画家の心の奥深くに刻まれたものであり、昭和二十年代半ばには特に画家の心を強く引き付けて、月をモチーフとした一連の作品が生み出され、そしてまた何十年という時を経た後に、画家の心の中で醸成されて、再び画面の中に登場してきたのだとは言えまいか。

元宋の故郷は、霧の深い地としても知られている。作中の月はしばしば霧にけぶったように描かれているが、それもまた画家の心に息づく故郷の風景の一部であるのかもしれない。

(文・永井明生)

永井 明生(ながい あきお)
1971年広島県生まれ。1996年より広島県立美術館に勤務し、主に近現代日本画を担当。2003年から三次市に出向し、2006年に開館した奥田元宋・小由女(さゆめ)美術館の開館準備にたずさわる。2014年から奥田元宋・小由女美術館に勤務。奥田元宋の師である児玉希望の研究を継続するほか、これまでに「児玉希望展」「上村松園展」「平山郁夫展」「船田玉樹展」「川合玉堂展」などの展覧会を企画。

韓非子とその思想

津山工業高等専門学校 教授

杉山明

戦国の七雄の一国に生まれた思想家の韓非は、法と術を組み入れた独自の法家思想を書き記した。乱世に終止符を打ったこの「韓非子」には、どんな思想がこめられているのだろうか。

戦国時代と韓非

秦が統一する前の数百年間、中国大陸は多くの国に分裂し、強国が弱小国を侵略、併呑する弱肉強食、群雄割拠の時代であった。中でも有力だった、燕、韓、魏、趙、齊、秦、楚の七カ国を「戦国の七雄」と呼ぶ。このように言うとき戦国七カ国があたかもプロ野球のリーグ戦のように覇を競ったように見えるが、実は西の新興国、秦が東へ東へと進出してくるのを他の六カ国が同盟と離反を繰り返しながら、懸命に防ぎ続けたというのが真相である。

韓非の生まれた韓は、地理的な要因もあって、秦の圧迫を最も強く受けた国である。韓非は儒家の荀子に学びその「性悪説（人の本性は悪である）」を哲学的背景とし、これに商鞅の「法（法律主義）」と申不害の「術（家臣団統率のための技術）」を組み入れ、独

自の法家思想を完成させた。国難を憂えた韓非は何度も韓王に上書して富国強兵を説いたが受け入れられることはなく、失意の中、自らの思想を十万余言の書に著した。現在に残る「韓非子」である。漢文の教科書に出てくる「矛盾」「株を守る」「逆鱗」等の故事成語の典故としても名高い。

もちろん、これらは単なるおもしろ話、昔話ではない。「株を守る」は儒家が古代の聖人による仁政を称賛し「いにしえに帰れ」と主張するのを、たまたまうまくいったことを必然と信じる愚かな農民に例えたもの、「矛盾」は堯、舜という伝説の二人の聖人が、ともに善政を行ったことは合理的にはあり得ないことを皮肉ったもの、「逆鱗」は王を龍になぞらえ、侵してはいけない絶対権力としたものだ。ユニー



クな例え話で相手を説き伏せ納得させる、その巧みな話術も「韓非子」の大きな魅力の一つだろう。

韓非の思想

韓非の思想を一朝一夕に理解することは難しいが、あえてその要諦を述べると以下のようなかたちであろうか。

- 一、法律第一主義
あらゆることに法律が優先する。た

賞必罰を奉じた家臣団もよくその責務を果たした。秦が他の六カ国を滅ぼし中国大陸を統一するのは、韓非の死からわずか十二年後のことである。韓非の思想は秦王という冷酷な男によって実践され、その正しさが証明されたということになる。

法家思想の限界

こうして全国制覇を果たした秦であったが、その命運が尽きるのは早かった。始皇帝というスーパースターの病死の後、各地で反乱が起き、ついに滅んでしまったのである。発端は陳勝、呉広という二人の農民による反乱だった。陳勝、呉広は都、咸陽の土木工事を命ぜられた農民団を率いて都へ向かったのだが、大雨に降り込められ、

歴史を学ぶのは、そこから教訓を得て今の世の中に生かすためである。われわれが韓非の生涯と秦の歴史から得るものは何だろう。秦が他の六カ国を滅ぼし覇者となったのは、もちろん法家思想に負うところが大きい。戦国時代のような非常時にあつては、国を強くし、統制を厳しくしなくては生き残れない。しかし統一が終了し平和な時代がやって来ると、法律絶対と厳罰主義では人々の生活は息苦しく、厭世観（悲観主義）が増す。秦に代わった漢は儒教を国教とし徳治主義（道徳により民を治める政治）による政治を進め、二百年以上という長期政権となった。乱世の法家思想、平時の儒家思想という結論は、安直過ぎるだろうか。

と上着をかけた典冠（王冠の管理者）を罰するのは、その職務が職名を超えたからであり、何もしなかった典衣（王の衣服の管理者）を罰するのは、その職務を全うしなかったからである。

法家思想と富国強兵

韓非の思想を最もよく取り入れ実践したのは、皮肉にも韓にとって最大の脅威である秦であった。秦王（後の始皇帝）は韓非の書を見て深く感銘を受け、何とかして韓非を秦に招こうとし、韓を武力で圧迫し、韓非を使者として

秦に送るよう迫った。当時の秦の宰相は韓非にとっては同門の李斯であったが、李斯は韓非を歓迎しなかった。韓非の才能を熟知する李斯は、非情な秦王が自分を更迭して韓非を用いることを恐れ、秦王に讒言して韓非を牢獄につないだのみならず、そのまま毒殺してしまった。あまりに有能過ぎた男の悲劇である。

秦王の下、法家思想によって富国強兵を進めた秦の国力は着実に伸長した。産業振興によって経済力が増し、鉄の規律を誇る軍隊が組織された。信

profile

杉山明(すぎやまあきら)

1956年岐阜県生まれ。文学修士。津山工業高等専門学校教授。岡山大学大学院修了後、1985年から中華人民共和国遼寧大学に日本語専攻(専門)として3年間赴任。その後1991年から津山工業高等専門学校に勤務、現在に至る。本来の専攻は中国古典だったが、現代中国語や中国料理、中国社会学研究にも取り組んでいる。主な著書に「中国語入門&異文化理解ハンドブック」(共著、アルク)、「理系のための中国語入門」(共著、好文出版)、「食在中國—おいしい旅行会話」(東方書店)、「お食辞海—読んでおいしい中国料理」(牧歌舎)、「漢文への招待—入門から実践へ」(桐原書店)など。

船通山

《鳥取県・島根県》



鳥上滝、亀石コースともに登山口から山頂までは1時間強を要す 地図制作：磯部 祥行

やまたのおろち
八岐大蛇伝説の舞台である船通山は、鳥取県日南町と島根県奥出雲町の県境にある高さ一一四二メートルの山である。中国地域屈指のカタクリの群生地で見頃を迎える四月下旬から五月上旬は多くの人でにぎわう。

わくわくプールの先を右に進めば鳥上滝コースの登山口、左に進めば、亀石コースの登山口にたどり着く。それぞれ駐車場があるが、溪流沿いのやや急な道を登る鳥上滝コースとブナ林を見ながら登る緩やかな亀石コースを周回で巡るのがお勧めだ。

鳥上滝コースは石畳の道があり、途中で何度か沢をまたぎながら進んでいく。登山口から三十分ほどで、斐伊川の源流である鳥上滝に到着。その先の木段の上り道が一番の踏ん張りどころで、そこを過ぎるとカタクリが登山客を出迎えてくれる。遊歩道で亀石コースと合流し、山頂へ。スサノオノミコト



天叢雲剣出顕之地の記念碑。毎年7月28日には、ここで宣揚祭(せんようさい)が催される



カタクリの花



一面にカタクリが広がる山頂。天気の良いと大山や三瓶山、隠岐諸島まで見渡せる

が八岐大蛇退治の折に得た天叢雲剣の記念碑が立つ山頂では、三六〇度の大パノラマを味わえる。
この二つのコースのほか、南側の日南町の広域基幹林道船通山線の林間広場駐車場から、コンクリートの道を登って林間広場に入り、山頂を目指すコースもある。いずれのコースも豊かな植生に恵まれ、自然を存分に楽しめる山である。